

24. 第4学年口腔外科学の系統講義における実習導入について(東日本歯学会第22回学術大会 一般講演抄録)

著者名(日)	平 博彦, 金澤 香, 柴田 考典, 有末 眞, 武藤 寿孝, 永易 裕樹, 奥村 一彦, 村田 勝
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	23
号	1
ページ	136-137
発行年	2004-06
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00008872/

23. 第4学年口腔外科学の系統講義における授業評価について

○金澤 香, 柴田 考典, 有末 眞, 武藤 寿孝,
平 博彦, 永易 裕樹, 奥村 一彦, 村田 勝
(北海道医療大学歯学部口腔外科学教室)

【目的】 第4学年の系統講義を抜本的に改革するため、2003年度の第4学年から講座間のカリキュラム、およびシラバスの統合を図った。すなわち、従来は講座単位のカリキュラムにより、学生は平行して異なる单元について講義を受けていたのを、一つの单元について連続して受講できるよう改めた。

さらに、系統講義の問題点抽出の一助とすべく、全講義に授業評価を取り入れたので、その概要を報告する。

【方法】 授業評価は5段階のレーティング・スケールからなる質問10問、自由記載欄、および100点満点の総合の評価点3項目の評価票を作製し、原則として講義終了直前に評価票を配布し実施した。なお、評価票は無記名で記載させた。

【結果および考察】 授業評価票の配布は、72回の講義全てで行われ、回収率は、最高100%、最低12.4%、平均43.7%であった。当初100%近かった回収率は徐々に低下し、11月中旬には20%程度まで低下した。自由記載欄の記入率も同様であった。

このような回収率および記入率の低下は、毎回、回収した授業評価票の集計結果、および自由記入欄に対する教員の回答を学生に逐次公表しなかったために、学生が授業評価の意義を実感できなかったことに起因すると推測された。但し、全講義の授業評価と逐次集計結果の公表を実施するためには膨大なマンパワーが必要であり、今後の課題と考えられた。

24. 第4学年口腔外科学の系統講義における実習導入について

○平 博彦, 金澤 香, 柴田 考典, 有末 眞,
武藤 寿孝, 永易 裕樹, 奥村 一彦, 村田 勝
(北海道医療大学歯学部口腔外科学教室)

【目的】 共用試験歯学系OSCE実施のためのモデル・コア・カリキュラムにおいて、案として提示されているOSCE課題のうち、口腔外科に科せられることが予想される課題は、基本的診察および検査能力のうちのバイタルサイン、頭頸部診察、基本的技能のうちの手洗いと手袋着用、および基本的臨床技能のうち単純抜歯と推測した。そこで、まず2003年度の第4学年前期において、バイタルサインと頭頸部診察を実施した。Pre-Clinical Training System (P.C.T. System) は、臨床実習への円滑な移行と歯科診療における基本的な原理と手技を習得させることを目的に本学が開発し、当科では、従来より術前消毒、局所麻酔、単純抜歯(縫合も含む)などに応用され実績を挙げてきた。

さらに、当科では臨床実習をより臨床参加型に改良するにあたり、単純抜歯(縫合も含む)の技術の習得を到達目標に設定した。それにより、単純抜歯(縫合も含む)実習において反復して実施する必要が生じ、反復履

修が可能なPCTモデルが必要になったので、その開発を本研究の目的とした。

【方法】 まず、第4学年97名を2班に分け、バイタルサインについては7月11日(金)4講時および14日(月)5講時、頭頸部診察については8月18日(月)5講時および25日(月)5講時に実習を実施した。まず、各班約49名全員で医学教育学会編ビデオテープの「脈拍・血圧測定」および「頭頸部の診察」をそれぞれ再生・視聴した後、各7名の小グループに別れ、各1名のインストラクターの指導のもと約2時間の相互実習を行った。

ついで、従来の一体型PCTモデルは実習に1回しか使用できない欠点を有していた。そこで、まず反復使用できるように歯列を一部分割することが可能かどうか検討するため、左下顎臼歯部分割モデルを試作した。ついで上下顎base、上下顎前歯部、両側臼歯部の計8ブロックからなる分割PCTモデルを(株)ニッシンの協力のもと開発した。

【結果および考察】正規の系統講義の時間外にもかかわらず、学生の参加はそれぞれ96%、94%であり、授業評価においても好評であった。また、開発した上下顎分割モデルは、上下顎base、上下顎前歯部、両側臼歯部の計8ブロックからなり、上下顎baseを大学備品として準備することにより、実習者は実習で必要な部分のみを購入・準備すればよくなる。これにより、学習者の技術修得

度に応じ、必要なブロックの交換のみで繰り返し実習を行うことが可能となり、より確実な教育目標への到達が可能となった。

さらに、本モデルを採用する大学が増えることにより、各ブロックの量産効果が期待され、実習生の経済的負担を軽減できると考えられる。

25. 第4学年口腔外科学の系統講義におけるチュートリアル学習の導入について

○武藤 寿孝, 金澤 香, 柴田 考典, 有末 眞,
平 博彦, 永易 裕樹, 奥村 一彦, 村田 勝
(北海道医療大学歯学部口腔外科学教室)

【目的】第4学年における口腔外科学系統講義の目標は、口腔外科学に関連する幅広い知識を獲得とともに、自らの疑問に対し適切な回答を探索し、発見し解決する態度、習慣、および技能を身につけることである。しかし、講義形式による情報伝達には限界があり、後者の問題発見、情報検索、コミュニケーション、および発表などの能力を身につけるためには、チュートリアル学習の導入が必須と考え、試行したので報告した。

【方法】まず、全員にチュートリアル学習の目的、方法について解説した。ついで、1グループ4～5名となるよう20グループに班分けし、各グループに異なった課題を4月中に提示し、1名のチューターを配置した。チューターは講師以上の7名が務め、それぞれ2～3グループを受け持ち、予めstory makingについて演習を行い準備した。チュートリアル学習は講義時間外に行い、発表は11月中旬からの10コマをあて、1グループ発表20分間、質疑応答15分間、チューターのコメント5分間とした。グループ発表の評価は学生による相互評価とし、5段階のレーティング・スケールからなる質問10問、自由

記載欄、および100点満点の総合的評価点3項目からなる評価票を作製し、発表開始前に評価票を配布し実施した。なお、評価票は記名とし、相互評価票の提出をもって出席とした。

【結果および考察】チュートリアル学習の成果発表に対する学生の出席率は高く、最低でも60%を超えており、相互評価票における自由記載欄の記入率も常に40%以上と格段に高く、本演習は学習意欲の向上に寄与すると考えられた。

学生による相互評価のうち100点満点の総合的評価点では、それらのグループごとの平均点が85～60点の間に分布し、おおむね妥当な評価と考えられ、相互評価を形成的評価に採用できると考えられた。

また、学習目標の達成度を100点満点で自己評価させたところ、49%が100～80点を、41%が79～60点を、10%が60点未満を示し、さらに、68%の学生が、次年度の学生にこのチュートリアル学習を継続することについて賛意を示しており、大多数の学生が何らかの達成感を得ているものと推測された。

26. 本学歯学部附属病院地域支援医療科活動報告 第3報

○松原 国男*, 越野 寿**, 平井 敏博**, 吉野 夕香***
(*歯学部附属病院地域支援医療科・**歯学部歯科補綴学第1講座・***歯学部附属病院事務部)

本学歯学部附属病院は地域からの要望に応えるべく、平成12年11月に「地域支援医療科」を新設し、訪問歯科診療室所属の歯科医師と各科・部署の担当者が診療にあたる体制を整備した。

今回は、平成15年1月から11月末までの「地域支援医

療科」としての活動について報告する。

1. 訪問歯科診療の実績

訪問診療を実施した患者数は135名（平成13年同期間：257名）であり、延べ訪問診療回数は995回（平成13年同期間：716回）であった。